

ベトナム中部ホイアン市の町家における中庭の研究 - 町並み保存をめぐる動きを通しての一考察 -

藤原美代子

キーワード：ベトナム、町並み保存、歴史的市街地、町家、中庭

1. はじめに

アジア交易の拠点であったベトナム中部ホイアンは、フランス植民地時代以降はその役割を終えて開発から取り残され、ベトナム戦争による破壊も避けられた結果、相当規模の古い町並みを残している。この歴史的市街地はベトナム政府によって1985年に文化史跡に指定され、ヨーロッパ人を中心に多くの観光客をあつめている。しかし、熱帯モンスーン気候の厳しい条件の下、古建築の傷みが激しく1991年以来、日本の文化庁や昭和女子大学のグループが歴史都市ホイアンの町並み保存に対し技術協力を進めている。また、昭和女子大学国際文化研究所を中心とする国際共同研究チームにより、ホイアン旧市街の建築・都市・考古学を中心とした総合的調査研究が進められてきた。

ホイアンの古建築は、山田(1994)によれば、「鰻の寝床」式の長方形の町家で「前家」と「後ろ家」と呼ばれる2つの建物を「橋家」と中庭とで結ぶのが一般的な配置構成である。友田(1994)、内海(1994)らは、伝統的町家における中庭を、庭園としての機能をもつ空間、あるいは通風採光などの環境調節機能をもつ空間として位置づけている。町家は中庭より前側がパブリックゾーン、後ろ側がプライベートゾーンとに大別されていたが、増改築等の際に、中庭が失われてしまう場合があり、環境や格式上重要な意味をもつ中庭の喪失に対して疑問視する友田(1994)らの考え方がある。友田(1994)は、建て替え新築住宅についても、町並み保存上問題が多いと指摘している。一方、小倉(1997)は「ホイアンの保存対象地域に居住している6500人のうち20%の人は文化資産を保存する意志はない。自分の居住する家は大切とは思っていない。むしろ新しい家、コンクリートの高いビルを建設したいと願っている」と報告している。そして宮城(1992)は歴史的町並みの保存について「日常的な生活空間を対象とする以上、現状凍結的な保存は許されず、常に新しいものを生活空間の中に組み入れる柔軟性が必要であり、保存する「こと」と保存する「もの」から抽出されたエッセンスは、将来の空間形成に何らかのかたちでフィードバックされなければならない。歴史的なものと現代の営みの間に一定の確かな文脈をつくりだすこと、現代の環境と未来に予想される営みの間にきちんとした脈絡をもたせることが、保存の目的であるべきだ」としている。筆者は基本的に宮城の論に賛同するものであり、ホイアンにおける町並み保存の目的再確認及び、住居空間構成に関する居住者の認識確認の必要性が生じていると考える。

2. 研究目的および研究方法

町並み保存の目的を考察しつつ、町家の空間構成上特徴的なオープンスペースである中庭の現状や町家で生活する人々の中庭に関する認識を明らかにすることにより、住居の空間構成の方向性を提言することを目的として、本研究を行なう。

本研究では大別して、(1)ホイアンの自然地理・歴史文化・社会経済的状况のもとでの町並み保存の位置づけ及び目的の考察、(2)ホイアンの歴史的町並みにおける町家中庭の研究、の2つの側面に関する実証的分析をすすめる。(1)に関しては主として文献資料の分析による考察を行なう。(2)に関しては文献資料の分析により歴史的町並みの空間構成とオープンスペースに関する考察を行なうとともに、1997年8月、11月、1998年3月、9月の4回にわたるホイアンの保存対象地域町家中庭の現状調査及び町家の居住者からの聞き取り調査結果を分析して、中庭の望ましい存続形態と住居の空間計画上の提言を行ない、今後の課題を論じる。

3. ホイアンの自然地理

(1) ホイアンの位置と地形の概要

ホイアンは北緯15°50'、東経108°20'、インドシナ半島の南シナ海に面した沿岸部の中間点に位置する。海岸と平行して南北に走るチョンソン山脈が海岸に迫りインドシナ半島では平野部が最も狭い地域にあって、中部高地のゴックリン山(標高2598m)を水源とするトゥボン川河口付近の三角州上にホイアンの市街地が開けている。海拔高度は10m前後である。ホイアンは海岸砂丘、沼沢地、感潮帯湿地が発達しているところから、トゥボン川だけでなく、海の堆積作用によって形成されたことがわかる。

(2) 気温と降水量

ベトナム北部のハノイは温暖夏雨気候、南部のホーチミンはサバナ気候、中部のダナン

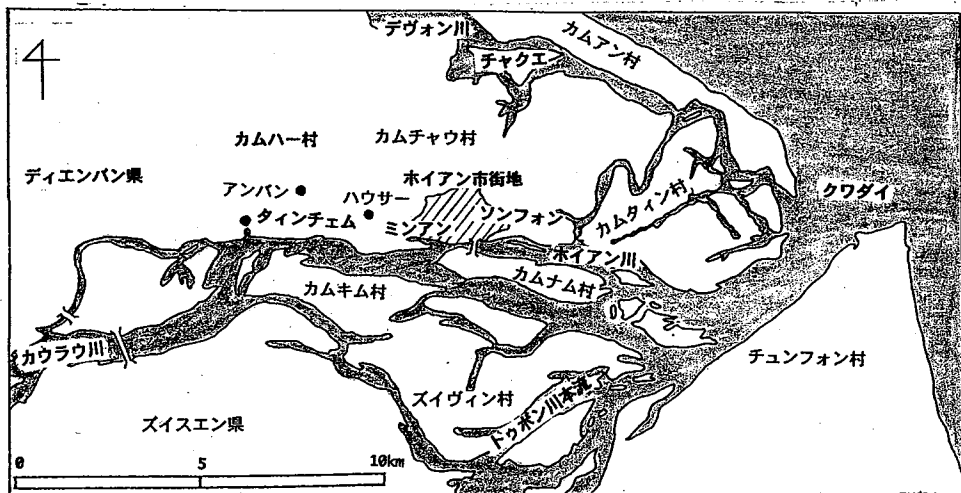


図1 ホイアン近郊図

出典：25万分の1地勢図をもとに筆者作成

表1 各地方の月別平均・最高気温(°C)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
ハノイ	平均最高気温	20.4	20.4	23.1	27.3	31.7	32.8	32.2	32	30.9	28.8	25.6	22
	平均最低気温	13.8	14.7	17.5	20.8	23.9	25.5	25.7	25.4	24.3	21.6	18.2	15
	降水量	18	25	46	84	192	240	296	310	258	125	47	20
ダナン	平均最高気温	24.7	26.1	28.1	30.8	33.1	34.5	34.2	33.9	31.6	28.8	27.1	25.1
	平均最低気温	18.8	19.7	21.3	23.1	24.6	25.3	25.2	24.9	24	22.9	21.6	19.7
	降水量	111	39	24	29	63	76	83	116	373	585	368	223
ホーチミン	平均最高気温	31.6	32.9	34	33.6	33.4	32.2	31.4	31.5	31.2	31	30.9	30.7
	平均最低気温	21	21.9	23.5	24.9	24.7	24.1	23.9	24	23.8	23.6	22.8	21.6
	降水量	11	6	10	50	218	298	279	271	312	267	111	35

出典：ベトナム国防省ダラット地図出版部編（1997）「ベトナム社会主義共和国地図」

は熱帯モンスーン気候である。ホイアンにおける気温と降水量の観測データはないが、ホイアンの北方約25kmに位置するダナンの気候とほぼ同じであると判断できる。

(3) 植生

ホイアン周辺の森林は、フタバガキ亜科の樹木を代表樹種とする地域に属すると考えられる。古来、ベトナム中部はその背後の森林資源をもとに、沈香や肉桂の産地として知られ、ホイアンはそれらの輸出港でもあった。ホイアン周辺からさらに奥地にはいと、乾季には落葉するフタバガキの仲間を代表種として、ジンチョウゲ科のジンコウ属のジンコウや、クスノキ科のニッケイを構成種に含む森林があったと考えられる。ホイアンからトゥボン川沿いに30km程度遡ると山地がある。1997年11月の筆者調査時そこには自然植生は殆ど残存せず、新しく植林されたユーカリの幼木が全山を覆っていた。なお、筆者調査時、ホイアンの市街地の街路、公園に見られた木本性の植物の主なもの、モモタマナ、ハウオウボク、モクセンナ、ビルマネム、ナンヨウザクラ、ココヤシ、シロバナインドソケイ、ベンガルヤハズカズラ、キバナキョウチクトウ、アリアケカズラ、タマリンド、ナンヨウスギなどであった。

4. ホイアンの歴史と文化

ホイアンの町並みの独自性を検討するにあたっては、重層的な文化基盤を視野に入れる必要がある。18世紀後半以降の町並みの中にも「チャムの井戸」と呼ばれる古い井戸が存在し、郊外ではチャム様式の象の彫刻、チャムの神像、チャムの祭壇の断片などが発見されている。また、郊外の農村地域には17世紀のものと考えられている「日本人の墓」が残存し、サーフィン文化の遺跡が点在している。

17.18.19世紀のホイアンは経済交流だけでなく、中国・日本・西洋諸国とベトナムの文化交流の中心でもあり、仏教・儒教・キリスト教の史跡や、日本橋(来遠橋)など多くの文化的要素を残した。文化的接触センターでもあったホイアンは、サーフィン文化・チャム文化・ベトナム文化の積み重ねの上に日本や中国や一部の東南アジア諸国および、フランスやアメリカなど西欧諸国の文化的要素も取り入れており、その中で中国文化の影響が最も長期にわたり深いという重層構造になっている。ホイアンはキリスト教の流入の入り口

でもあり、ローマ字化されたベトナム語(クオックゲー)が17世紀はじめに生まれた所でもある。したがって西欧の文化的要素は文化基盤として見逃せない要素である。

5. ホイアンの社会経済状況

(1) 北・中・南部の社会経済比較とホイアンの産業

ベトナムは面積約33万km²、人口約7,250万人(1994推計)の南北に細長い国で、ホイアン市は中部のクアンナム省に属し、面積60.1km²、人口75,800人である。1986年、ベトナムは中国の初期「改革開放」政策に近似した「ドイモイ」政策を宣言し、1991年からは、GDP成長率は毎年高水準で推移している。しかし、市場経済化の進展によって、地域差・貧富差が拡大傾向にある。中部各省の1人当たり平均月収は、全国平均以下である。ベトナム政府は、この格差是正のため、特に中部重点地域の経済開発を重要視している。

ベトナム経済研究所(1997)によれば、中部の経済は伝統的軽工業及び観光が中心である。JICA(1997)によれば、ホイアンはサービス業の割合が大きい産業構造となっている。ホイアンには歴史的な町並みが残存しており、チャンパ王国の聖地ミソンへの入り口に位置しているために、それらを目的として訪れる観光客が多い。したがってホテル、食堂、みやげ物屋等、観光客をターゲットにしたサービス産業中心の経済となっている。

(2) ホイアンの観光開発計画と町並み保存

JICA(1997)は中部観光開発に関して、既存の観光インフラや施設を整備した後、本格的なマスツーリズムを呼び込むための観光拠点としてTPZ(観光促進ゾーン)の創設を提案している。TPZとは地方政府が指定する一定のゾーンであり、ゾーン内では①ホテルを始めとする観光施設への投資に対して一定のインセンティブが付与される、②上下水道施設等の基本インフラが公的セクターによって用意され環境へのネガティブな影響が排除される、③ユーティリティを始めとする適切な公共サービスが提供される、④開発に伴う地域住民との間の社会問題は公共側が責任を持って対応する、等のインセンティブが設けられる。JICA(1997)はTPZの1つとして文化・歴史の町であるホイアンTPZを提案している

ホイアンの観光開発には、既存の文化及び歴史資源の適切な維持管理を含めた保全の努力が必要である。ホイアンにおいては歴史的建造物の保全を行ない、かつての町並みの風情を残しながら郷土土産等の多様なショッピングが楽しめる観光スポットとしての演出が求められる。今後、本格化することが見込まれている観光開発にともない、建設活動や商業活動が活発化し、経済発展することが予測される中、福川(1997)は「町並み保存の目的は、第1に住民の生活や福祉を向上させることであり、そのために次の3点が主要な柱となる。1.文化財の保存、2.生活環境の維持・改善、3.経済社会の活性化」と整理している。しかし、これら3点は相互に対立する性格も内包している。福川(1997)は、経済が文化財保存を支える構造、仕組みが必要であり同時に、文化財保存が経済活性化へつながる構造、仕組みが必要であると説いている。そして、文化財の論理を強調しすぎると生活の不便が強いられ、近代生活の実現を安易に追求すると文化財が損なわれる点に関して、伝統的建物は近代生活にも快適で、豊かな生活空間を実現できるという論理を組み立てることの必要性を説いている

福川(1997)が論じている町並み保存の目的や、その目的を支えるための開発の原則に対

して、筆者は賛成の立場をとる。特に、その中でも、町並みを損なわない建築デザインへの手がかりとして提案されている項目の「中庭を設けること」と、「いきいきとした住民の生活が営まれているホイアンの魅力」に焦点をしばり、考察する。そして「伝統的建物は近代生活にも快適で、豊かな生活空間を実現できるという論理を組み立てる」道筋を、中庭を通して探求し、保存する「こと」と保存する「もの」から抽出されるエッセンスの将来の住居空間形成へのフィードバックに関しても考察する。

6. ホイアンの歴史的町並みにおける町家中庭の研究

(1) 歴史的町並みとオープンスペース

中庭を有するホイアンの町家は、オープンスペースの存在形態として町家の様式系列における空間構成原理に沿うものである。宮城(1992)は、これら町家の様式系列に類似する空間構成を持つ住宅様式を含め、一括して「中庭型住居」として1つのカテゴリーを構成することができる」と述べている。また、西沢(1974)は「コートが中心になり、コートの周りを部屋が取り巻いて「家とコートの交わりの上に成立している—すなわちコートと室の関係が主題となって」いる家がコートハウスである」と定義している。

本研究においては、「中庭型住居」と「コートハウス」は同義語として、また「中庭」と「コート」も同義語として扱う。したがって、ホイアンの中庭を有する町家は「中庭型住居」・「コートハウス」に相当する。なおベトナムにおいては「にわ」はVuon、「中庭」はSan Tronと呼ばれる。「中庭」は「にわ」の概念に含まれるものであるから「中庭」をVuonと呼ぶ場合もある。

図2は、ポンペイにおいて発掘された住宅の代表的な例である。宮城(1992)によれば、「この住宅平面では性格の異なった2つの中庭を核として空間構成がなされている。街路から玄関通路を経て最初に位置するアトリウム(Atrium)、さらにその奥に位置するペリスティリウム(Peristylum)である。これら2つの中庭は、領域形成のうえではアトリウムが外来者との商談・用談に用いられる空間として「公」的性格付けがなされている。これに対しペリスティリウムではこれを取り囲む各室が家族の居室となっており、水盤、飾柱、彫刻などが置かれ、自然土に植栽された低木・草花などの装飾的意匠が施される。極めて「私」的性格の強い空間であったと思われる。さらに「パンサの家」に見られるように、規模の大きな敷地ではペリスティリウムの背後にもクシュストゥス(Xystus)と呼ばれる一種のサービスヤードが続く。このように、古代ローマの住居では、敷地内のオープンスペースにおいて明確な領域形成を観察することができる」。

宮城(1992)は 図3の近畿地方における一般的な町家の空間構成モデルを示し、「ミセドマあるいはミセニワとゲンカンがアトリウムに、中庭がペリスティリウムに、さらにセド(背戸)がクシュストゥスに対応すると考えてよいであろう。敷地の街路側に位置するミセニワやゲンカンでは一般的な接客行為が、また敷地内部に取り込まれた中庭では、家族の日常生活や親密な接客行為が展開される。さらにセドはサービスヤードとして菜園や土蔵などが位置する。町家におけるこれらの3種のオープンスペースは、しつらえにおいても古代ローマの住宅におけるそれとほぼ同じ内容を持つ。このように、中庭型住居においては、オープンスペースに「私」的空間としての性格付けが色濃くなされた領域が存在する」としている。

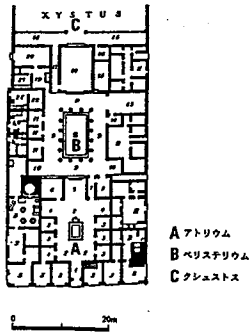


図2 「パンサの家」
出典：岡崎文彬(1981),p.107

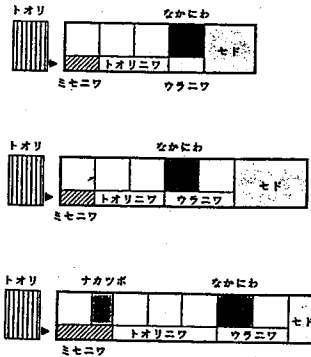


図3 近畿地方における町家の空間構成モデル
出典：宮城俊作(1992),p.145

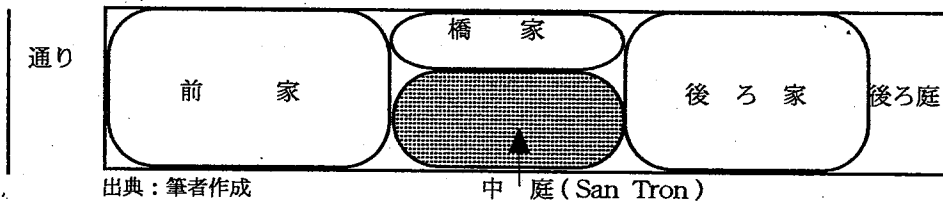


図4 ホイアンの町家の空間構成モデル
出典：筆者作成

図4は、ホイアンの歴史的町並みに残る伝統的町家の空間構成モデルである。山田(1994)によれば「ホイアンの町家は街路に面した「表」は取り引きや商売のための場所で「奥」は生活のための場所として主に使われる」。ホイアンの伝統的町家の空間構成モデルを、宮城(1992)の示した近畿地方における一般的な町家の空間構成モデル及び、古代ローマの中庭型住居と比較してみると、ミセニワとゲンカン(前家の店舗部分)、中庭は中庭、セドは後ろ庭にそれぞれ対応していると考えられる。しかし、ホイアンの町家中庭は、近畿地方の町家中庭や古代ローマのペリスティウムのような「私」的な性格付けのみならず店舗部分の接客空間からの眺めも意識した「公」的な性格をもつオープンスペースでもあった。つまり、ホイアンの町家中庭はアトリウム的な性格とペリスティウム的な性格をもつ、「公」と「私」の結節点として役割をもつ空間であると考えられる。

(2) 中庭型住居における「にわ」

近畿地方の歴史的市街地では「鰻の寝床」と呼ばれる間口が狭く奥行の長い宅地が一般的である。宮城(1992)は、近畿地方の歴史的市街地における宅地の「D/F比」、敷地の奥行(Depth)を間口幅(Frontage)で除した比率を算出し、その平均値を表2にまとめている。表3は山田(1994)によるホイアンの歴史的町並み調査結果をもとに筆者がD/F比を算定しその平均値を示したものである。

表2・表3より、近畿地方の歴史的市街地とホイアンの歴史的町並みにおいて、レロイ通り以外は、宅地平均面積、平均D/F値は近似した数値を示していることがわかる。宮城

表2 近畿地方の歴史的市街地の平均D/F値

対象地区	街区数	宅地単位数	平均敷地面積(平米)	平均D/F値
京都市中京区	7	368	148.3	3.24
京都市上京区西陣	6	346	174.2	3.93
京都市下京区	3	226	199.1	3.34
大和郡山市	11	316	229.2	3.01
橿原市今井町	14	236	163.5	2.39
近江八幡市	8	237	316.2	3.25

出典：宮城俊作(1992),p.153

表3 ホイアンの歴史的町並みの平均D/F値

	宅地単位数	平均敷地面積(m ²)	平均D/F値
チャンプー通り	17	148.2	3.68
レロイ通り	7	95.3	1.94
グエンタイホック通り	17	204.8	4.21

出典：山田幸正(1994),p.35より 筆者作成

(1992)は、近畿地方の歴史的市街地において、「宅地の奥行長が大きくなるにしたがって複数の「にわ」が存在する」ことを報告している。ホイアンにおいては山田(1994)が報告している家屋調査の概要と筆者の調査結果を総合すると、平均D/F値3.68のチャンプー通りでは15戸のうち14戸(93%)に中庭があり、平均D/F値1.94のレロイ通りでは6戸のうち3戸(50%)に、平均D/F値4.21のグエンタイホック通りでは15戸のうち11戸(73%)に中庭があることがわかった。平均D/F値2.0以下になると、中庭を有する割合が極端に低くなることが明らかになり、ホイアンにおいても宅地の奥行長と「にわ」の存在の間には、緩やかな相関関係があると考えられる。

筆者は1997年11月及び1998年3月に、ホイアンの町家中庭の実測、写真撮影、スケッチ等の調査を行なった。図5・6、写真1・2はその一部である。グエンタイホック101(写真1、図5)の中庭は植栽、池、石組、モザイクの飾り壁等の施された、眺めを意識したしつらえとなっている。グエンタイホック84(写真2、図6)の中庭には、たらい、バケツ、コンロ、洗濯ロープといった生活のための実用的な設備とともに、ココナツの皮等家の仕事に応じた様々な物が雑然と置かれている。

(3) 中庭の機能に関する居住者の認識

① 調査の目的

ホイアンの歴史的町並みは、保存と観光開発に伴う空間変容の動きのなかで、「何を保存すべきか」という模索が続いている。伝統的に住居の空間構成上重要な意味を持ってきた中庭の機能のなかに、ホイアンの人々の生活や文化とむすびついた「保存すべきエッセンス」が含まれているのではないかと仮定して、中庭の機能に関する居住者の認識を明らかにすることにより、「保存すべきエッセンス」について考察する。

② 調査の対象と方法及び調査内容

調査対象はベトナム・ホイアン市のチャンフー通りの23戸、グエンタイホック通りの21戸、グエンチミンカイ通りの5戸、計49戸である。(図7)

調査年月日は、1998年3月26・27・28日の3日間で、調査方法は、ベトナム語の質問紙を提示して説明しながら、面接、聞き取り調査を行い、その場で質問紙に解答を記入する方法をとった。なお、ベトナム語の解釈については、調査に同行したホイアン史跡保存管理センターのグエン・ヴァン・ペー氏の英語翻訳に負うところが大きい。

調査内容は、町家の住環境に関するもの、中庭の設備・仕様に関するもの、中庭の機能とその重要性に関する居住者の認識に大別される。

③ 町家の住環境と中庭の有無

a. 先祖の出身地別による中庭の有無

先祖がベトナム出身の家で中庭を有するのは、21戸のうち12戸(57.1%)である。先祖が福建出身の家では14戸のうち10戸(71.4%)に中庭があり、先祖が潮州出身の家では7戸のうち6戸(85.7%)に中庭がある。また、先祖が海南出身の家は2戸ともに中庭があ

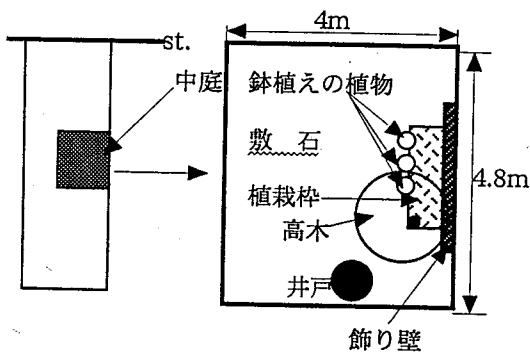


図5 グエンタイホック101の中庭
出典：現地調査により筆者作成

写真1 グエンタイホック101の中庭
出典：1997年11月筆者撮影

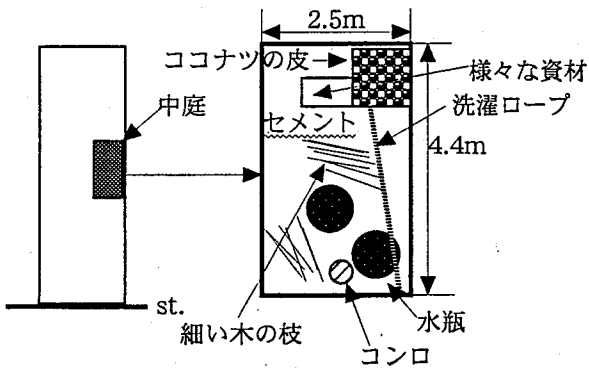


図6 グエンタイホック84の中庭
出典：現地調査により筆者作成



写真2 グエンタイホック84の中庭
出典：1997年11月筆者撮影

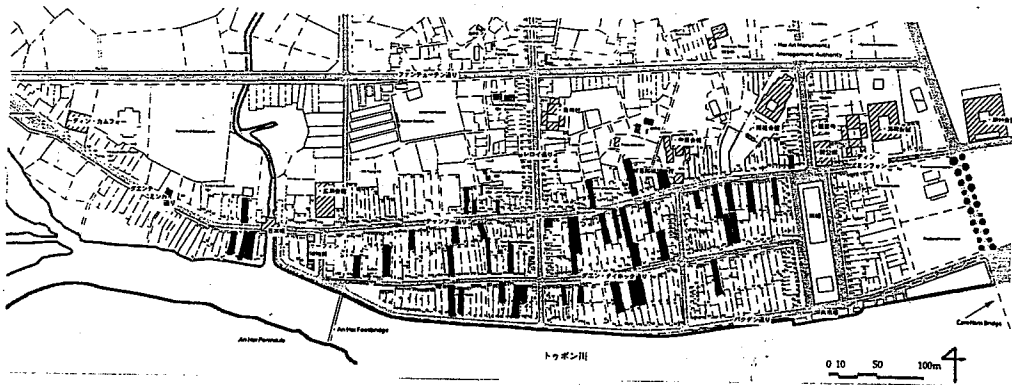


図7 ホイアン市街地における聞き取り調査実施家屋

出典：福川裕一・友田博通(1996),SD9603 p.80,81に筆者加筆

表4 先祖の出身地別による中庭の有無(戸)

	中庭あり	中庭なし	計
ベトナム	12	9	21
福建	10	4	14
海南	2	0	2
広東	0	2	2
潮州	6	1	7
その他	1	2	3
計	31	18	49

出典：聞き取り調査より筆者作成

表5 家の中が明るい暗いか(戸)

	中庭あり	中庭なし	計
明るい	26	9	35
どちらとも言えない	4	0	4
暗い	1	9	10
計	31	18	49

出典：聞き取り調査より筆者作成

り、先祖が広東出身の家は2戸ともに中庭がなかった。この調査では中国系の先祖をもつ町家の方に中庭が多い傾向が見られた。

b. 家の中が「明るい」か「暗い」か

中庭や吹き抜けのある町家では家の中が「明るい」と認識している居住者が多数で、中庭や吹き抜けのない町家では「暗い」と認識している居住者が半数以上となっている。

c. 家の中は「涼しい」か

中庭のない町家においては、調査戸数のおよそ4分の1が家の中を「暑い」と答えており中庭のある町家と比較して「暑い」と認識している居住者が多いことがわかる。なお、1998年9月4日14時から14時30分の間に、各町家の、通りに面した入り口から約7mの地点の室温を実測したところ、屋外の日陰の気温は35.5℃、中庭のあるグエンタイホック101では34.0℃、中庭のあるチャンフー80では34.1℃、中庭はないが吹き抜けのあるグエンチミンカイ4では34.2℃であった。

d. 通り別による中庭の有無

グエンチミンカイ通りの町家の吹き抜け空間については、中庭的空間とも考えられるが本調査では中庭は住宅敷地内オープンスペースで周囲を建築物で囲まれた空間と限定したために、中庭として扱っていない。

表6 家の中は涼しいか(戸)

	中庭あり	中庭なし	計
涼しい	29	14	43
どちらとも言えない	1	0	1
暑い	1	4	5
計	31	18	49

出典：聞き取り調査より筆者作成

表7 中庭の有無(戸)

	中庭あり	中庭なし	計
チャンフー通り	14	9	23
タイホック通り	17	4	21
ミンカイ通り	0	5	5
計	31	18	49

出典：聞き取り調査より筆者作成

表8 中庭があるのはよいことか

	中庭あり	中庭なし	計
よい	31	15	46
どちらとも言えない	0	2	2
わるい	0	1	1
計(戸)	31	18	49

出典：聞き取り調査より筆者作成

表9 中庭の床(地面)の状態(戸)

	チャンフー	タイホック	計
土	0	0	0
敷石	2	4	6
レンガ	3	0	3
セメント	9	13	22

出典：聞き取り調査より筆者作成

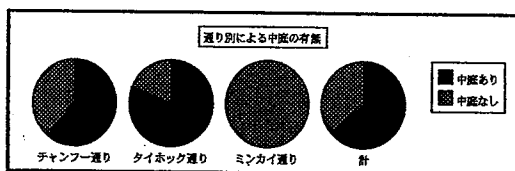


図8 通り別による中庭の有無

出典：聞き取り調査より筆者作成

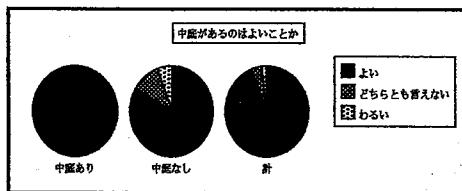


図9 中庭があるのはよいことか

出典：聞き取り調査より筆者作成

e. 「中庭があるのはよいことか」

④ 中庭の設備・仕様

a. 中庭の広さ

中庭の広さについては、31戸中23戸が(3m×3.5m)～(4m×7m)の範囲内にあり、約3/4は10.5㎡～28㎡の広さである。

b. 中庭の床(地面)の状態

c. 中庭の設備

中庭の設備では、植栽、水瓶、井戸が3大要素と考えられる。庭園としての機能をもつ植栽がおよそ4分の3の中庭にあった。次に、実用的機能をもつ水瓶、井戸が約半数の中庭にあった。精神的なよりどころとしての祭壇を中庭に備えているのはおよそ4分の1であった。池、石組、隣家との境界の装飾壁面など庭園としての機能をもつ要素も確認され

表10 中庭の設備(戸)

	チャンファー	タイホック	計
井戸	7	7	14
植栽	13	10	23
石組	2	1	3
池	2	2	4
水瓶	9	12	21
コンロ	0	4	4
机	0	1	1
椅子	0	1	1
炊事場	0	5	5
物置	0	1	1
菜園	1	0	1
線香立	2	1	3
祭壇	4	3	7
その他	2	6	8

出典：聞き取り調査より筆者作成

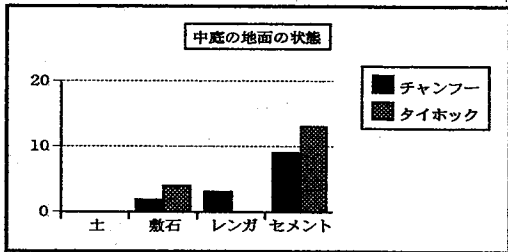


図10 中庭の床(地面)の状態(戸)

出典：聞き取り調査より筆者作成

た。また、チャンファー41番の中庭には「踊る女性像」のチャムのプレートやヒンドゥーの神像が置いてあり、チャム文化とのつながりの一端が確認された。中庭に祭壇がある7戸のうち、5戸は壁に祭壇が設けられていた。祭壇に祀られているのは「天の神」が4戸「竈の神」が2戸、「不明」1戸となっている。

チャンファー23、80、グエンタイホック22の中庭で確認された石組は、中国庭園に見られる太湖石に酷似している。大室(1995)によれば「太湖石とは、蘇州に近い太湖でとれた石灰石で、水触によって複雑な穴や凹凸で覆われていて」蘇州の庭園などに多く用いられている石のことである。ホイアンの町家の中庭の井戸は実用的な機能をもつ設備であるが三浦(1995)の見解に従うならば、太湖石と同様に「壺のテーマ」、「洞天」につながる。つまり井戸はその中にもう一つの「宇宙大に反転する」世界を内包している装置である。また、中庭空間そのものが日本では「壺」と呼ばれる場合があり、「壺のテーマ」、「洞天」につながることもできる。

西沢(1974)によれば、中庭の泉や水瓶は「出入口から入れた空気を冷たく冷やし気流すなわち風を起こさせるシステム」である。ホイアンの町家中庭において、設備の3大要素である。井戸と水瓶は実用的な機能と同時に、「風を起こさせるシステム」として働いている可能性もある。なおホイアンの町家中庭に泉は確認できなかったが、池があり、これも同様に「風を起こさせる」水辺であると考えられる。

⑤ 中庭の機能とその重要性に関する居住者の認識

中庭の機能とその重要性に関する居住者の認識に関する聞き取り調査(表11、12、図11)によれば、「中庭があるおかげで部屋が明るい」と「中庭を通して風が入る」がを認識しているのは、31戸中31戸であった。また「中庭を通して風が入る」を重要としたのは31戸中29戸、「中庭があるおかげで部屋が明るい」を重要としたのは31戸中28戸で、認識・重要度ともに通風・採光の環境調節機能が最高水準であった。

以下、高い水準で認識されていたのは、自然的空間としての機能の「空・雲・月・星が見える」が21戸(67.7%)、実用的機能の「中庭で体操をする」が19戸(61.3%)、庭園としての機能の「中庭には木や花や池があって美しい」が15戸(48.4%)、実用的機能の「中庭で子どもが遊ぶ」が14戸(45.2%)であった。一方、重要度で通風・採光の環境調節機能について高い水準を示したのは、自然的空間としての機能の「空・雲・月・星が見える」が11戸(35.5%)、実用的機能の「中庭で体操をする」、「中庭で洗濯をする」が10戸(32.3%)、「中庭に洗濯物を干す」が9戸(29.0%)であった。

⑥中庭における保存のエッセンス

a. 中庭のない町家

グエンタイホック65は1994年に改築して、以前中庭であった場所は現在、台所・食堂便所になっている。この町家の居住者は、中庭がなくなって「便利になった」、「部屋の中が暗くなった」、「部屋の中が暑くなった」と答えている。聞き取り調査中も蒸し暑く汗が吹き出すという状況であった。本調査49戸中この町家の居住者のみ、「中庭があるのはわるいこと」と答えている。通風、採光などの環境調節機能をもっていた中庭を喪失し、「部屋が暗く、暑くなった」が一方では台所、食堂、便所などが「便利になった」ために生活上の利便性を優先的に考慮した結果、総合的な判断として「中庭があるのはわるいこと」と答えているものと考えられる。このグエンタイホック65の解答は、ホイアンの町家における中庭の将来像の一方を示していると考えられる。

本調査の段階では「中庭を増築のスペースとしてとってある」という解答は1戸のみであった。しかし、今後マスツーリズムを呼び込む本格的な観光拠点として「ホイアンTPZ開発プロジェクト」が実施されるに伴い、雇用機会の創出等の経済効果及び周辺地場産業に対する波及効果が予想されており、そうなると、町家の居住者のあいだで様々な住要求の変化が起こることが予想される。中庭の実用的機能が重要な要素として位置づいている本調査結果も考え合わせると、居住者の経済力向上とモータリゼーションの進展に伴い住宅敷地内オープンスペースの変容が予想される。自家のガレージを敷地内にとるようになると、オープンスペースの大部分は敷地の接道部に集約されるようになる。台所・食堂等の増築スペースやガレージのスペースは敷地内オープンスペースの切り詰めによって捻出される可能性が大であり、中庭の喪失も予想される。1997年11月の筆者調査時、チャンフー86は3階建て住宅に建て替えられており、住宅敷地前面の接道部にガレージを設けていた。この住宅は中庭のないタイプである。このような極端な町家の外観の変化は歴史的な風情を必要とする「ホイアンTPZ」に適合しない。町並み保存と居住者の生活の利便性の保障が今後の課題となる。今後、住宅敷地内の住戸とオープンスペースの配置と、そのありようが再編成される可能性があり、中庭を喪失した町家の現状は、中庭における保存のエッセンスを訴えかけているという意味で、住居の空間構成の方向に一定の示唆を与

表11 中庭の機能

実用的機能	A.中庭で仕事をする B.中庭に自転車やバイクを置いている C.中庭で洗濯をする D.中庭に洗濯物を干している E.中庭で炊事をする F.中庭で子供が遊ぶ G.中庭で食事をする H.中庭で昼寝をする I.中庭に不要なものが置いてある J.中庭で体操をする K.中庭に果物のなる木が植えてある L.中庭を増築のスペースとしてとってある
私的コミュニケーションの場としての機能	M.満月の夜に家族が集まって夕食後に中庭で話をする N.正月に家族が集まって中庭で話をする
公的コミュニケーションの場としての機能	O.中庭で宴会をする P.商談をする(客の接待をする)
庭園としての機能	Q.中庭には木や花や池があって美しい R.中庭を眺めるのが好きだ
環境調節機能	S.中庭があるおかげで部屋が明るい T.中庭を通過して部屋に風が入る
自然的空間としての機能	U.空・雲・月・星が見える
精神的よりどころとしての機能	V.祭壇(神様)にお祈りをする

出典：宮城(1992),p.178をもとに筆者作成

表12 居住者の認識(戸)

	認識している	重要だと考える
A	9	4
B	10	3
C	13	10
D	12	9
E	6	3
F	14	6
G	4	0
H	5	1
I	8	2
J	19	10
K	6	2
L	1	0
M	11	1
N	12	6
O	6	3
P	3	3
Q	15	6
R	11	4
S	31	28
T	31	29
U	21	11
V	8	4

出典：聞き取り調査より筆者作成

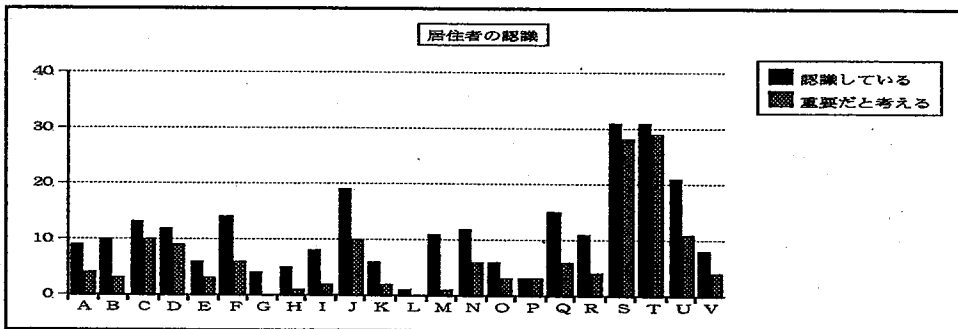


図11 中庭の機能とその重要度に関する居住者の認識(戸)

出典：聞き取り調査より筆者作成

えうるものである。

b. 保存すべきエッセンス

ホイアンでの聞き取り調査の結果から、町家に住む人々は中庭を、第1に、部屋を明るく、涼しくするために、必要な空間として重要視していることが明らかになった。空気の流れを促す開放的な空間や設備を住居内に組み込み、住環境を快適にする装置は、保存す

べき第1のエッセンスであると考える。

第2に、眺めるための美しいしつらえも捨てがたいものはあるが、健康的な生活を維持するための実用的な機能の充実を、より強く望んでいるという結果が得られた。体操ができたたり、子どもが遊べたり、洗濯したり、洗濯物を干したりできる実用的な場や設備の確保と、眺めるためのしつらえとの共存が第2の保存すべきエッセンスであると考える。

そして、第3に、人々は中庭を、雲や空を見たり、満月の夜や、新月の夜に家族が談笑したり、正月に家族が集まったり、神を祀ったりするための空間として大切に考えていることが明らかになった。家族や知人とのコミュニケーション及び、自然や神との交流が、中庭における第3の保存すべきエッセンスであると考える。

7. 町並み保存と中庭の望ましい存続形態

(1) 町並み保存と「通りの賑わい」の現代的意味

福川(1997)は、ホイアンの町家と日本など外国の町家とを比較し、町家に一般的に観察される特徴を「間口が狭く奥行きが深いのは、通りの活動にできる限り多くの商家が参加し、かつ賑わいを生み出すためである。「近接」こそが都市の本質である。中庭を設けて棟を分けるのは、住宅の中に十分な光と通風を確保するためである。棟を分けることは機能的、社会的意味もある。通りに面して棟を置くことも、通りの賑わいを生み出すために欠かせない」と説明している。形成過程や変容過程の相違はあるが、都市の町並みが「近接」する家屋により構成されていることは、一般的な事実である。

建物の「近接」した町並みを保存することの意味は何か、という問いに対する答えとしては、「通りの賑わい」の維持、が考えられる。ホイアンはかつての商業センターとしての「賑わい」は失ったが、「ホイアンTPZ」として位置づけられ、観光の町としての新たな「賑わい」の創出が求められている。観光の町としての「賑わい」創出のためには、町家の伝統的なデザインを通り沿いに保存することが不可欠である。

林(1995)によれば、「現在全国に40ある重要伝統的建造物群保存地区選定地区のうち、近畿地方の都市にある保存地区は、京都市の産寧坂、祇園新橋、嵯峨鳥居本上賀茂奈良県橿原市の今井町、滋賀県の近江八幡、三重県の関宿及び神戸市の北野町山本通の8地区である。各保存地区では修理修景などの事業が継続的に行なわれ、徐々に景観が整ってきている。それとともに保存地区を訪れる観光客も年々増えつつあり、現在では、町並み保存は町おこしの手法として、一つのジャンルを確立したと実感できる」。近畿地方における町並み保存の実績は、ホイアンの町並み保存の今後に1つの方向性を示唆している。それは、町全体を文化財ととらえた景観保全の考え方と保存対象を原則的に建物外観に限定する考え方である。近畿地方の都市にある保存地区では、これらの考え方に沿った保存事業により、町全体の伝統的な景観を維持しつつ、住居内部における住民の生活の利便性追求が確保され、観光客を呼び込むという、「通りの賑わい」の現代的意味も実現しつつある

(2) ホイアンの町並みにおける中庭型住居の必然性

ホイアンが観光の町としての「通りの賑わい」を維持していくためには、少なくともホイアンTPZの観光開発計画におけるSanctuary Zone、保護区域とされている地区内の景観保全と、伝統的建造物の外観保存が必要である。ホイアンの伝統的町家の外観は、近畿

地方の町家の外観と比較すると、通りに面した正面部分がより開放的なつくりになっているために、建物内部の一定の範囲、例えば前家部分までは、通りからの視線を意識した伝統的なデザインを基本にすることが、必要と考えられる。このことは、福川(1997)による「継承すべき町家としての普遍的性格で①建物が分棟型であること、②主要な棟は街路に接して建てること、③中庭を設けること」等の確認事項に通じるものである。ホイアンにおいては、街路に接した主要な棟を伝統的なデザインで保存し、中庭を設けて建物を分棟型にすること、つまり、中庭型住居にすることが、町並み保存の要件となってくる。

ホイアンの伝統的町家は、ベトナム中部の建築様式を基本とし、中国風の装飾が施されたものから、西洋式ファサードを有するコロニアル風のものまで、デザインの幅が広く、建築素材面でも、木造、煉瓦造と変化に富んでいる。豊かな森林資源を有する中部山岳地帯を背景に繁栄してきたホイアンの歴史や、その建造物に多くの煉瓦を使用したチャムの文化の上に築かれたホイアンの文化が、建築素材にも反映していると考えられる。また、デザインの幅の広さは、チャム文化を基層とし、ベトナム、中国、フランスなどの重層する文化を反映した、ホイアンの独特の文化景観の表れと考えられる。様々な文化の影響を受けて成立したと考えられるホイアンの町家であるが、住宅敷地内の建物の配置構成をみると、奥行きが深い町家では、全てのタイプに中庭があるのが、基本的な配置構成となっている。これは、熱帯モンスーン気候の高温多湿な条件に対応した、都市住宅の形であるためと考えられ、自然条件の面からも、ホイアンの町並みにおける中庭型住居の必然性が確認できる。

(3) 中庭の望ましい存続形態

町並み保存上、景観的に問題のない住居内部の近代化の進展は避けられないものであるしかし一方で、文化財としてあるいは観光資源として伝統的町家を保存するという観点からのみならず、快適な住環境維持のために伝統建築の技術面を応用するという観点からも「熱気を逃し、新鮮な空気を呼び込めるオープンスペースの住居空間への組み込み」が、第1の「保存すべきエッセンス」からフィードバックされた望ましい存続形態である。

第2の「保存すべきエッセンス」は、健康的な生活を維持するための実用的な機能の充実と、庭園としての機能との共存である。筆者の調査によれば、およそ半数の中庭に水瓶と井戸があった。福建の中庭には水瓶はあるが、井戸は中庭ではなく別の場所にあったことを考えるとホイアンの中庭の独自性として、井戸の存在が浮上する。ホイアンにおいても本来は、井戸は後ろ庭などのサーピスヤードにのみ存在した可能性もあるが、現在では、井戸、水瓶などの水辺は、飲用水や洗濯などの生活用水としての実用的機能充足のためや、風を起こすシステムとして環境調節機能にも関わる、中庭の最重要設備の1つになっていると考えられる。また、井戸はチャンパ以来の重要な生活基盤でもある。筆者の調査にもとづけば、体操ができたり、子どもが遊べたり、洗濯をしたり、洗濯物を干したりできるなど、さまざまな活動が可能で空間の形態が存続されるべきであり、敷石、レンガセメント等による床面の舗装は不可欠である。また、庭園としての機能を果たす植栽は筆者調査の中庭の4分の3にあり、可動式の鉢植えが多く用いられていた。自然的空間としての機能も担っている鉢植えの木や花などは、実用的機能をもつ設備のある中庭に、眺めるための庭園としての機能を共存させるうえで、効果的で取り入れやすい設備である。その他、

池と石組(岩石)と植栽を組み合わせたミニチュアの庭園なども、眺めるための機能を備えた設備として存続される形態の一部であると考えられる。そして、洗濯物の乾燥や植栽の維持機能を充足させるためには、この多目的な空間が、日光の入るオープンスペースであることが求められる。第2の「保存すべきエッセンス」からは、「井戸に代表される水辺を備え、舗装された床面をもち、可動式か、それに近いコンパクトなデザインの植栽を有するオープンスペース」が、中庭の望ましい存続形態として提案できる。

第3の「保存すべきエッセンス」は「家族や知人とのコミュニケーション及び、自然や神との交流」など、自然的空間としての機能や、精神的よりどころとしての機能、私的・公的コミュニケーションの場としての機能である。ホイアンの町家の中庭は「公」と「私」の結節点として役割をもつ空間であると考えられる。空・雲・月・星などを見ながら、満月や新月の夜、正月などの特別な日に、家族や知人と談笑したり宴会を開いたりできる戸外室は、町家において存続されるべき形態である。また、第2の「保存すべきエッセンス」で考察した鉢植え等の植栽は、自然的空間としての機能とも関連する設備であり、存続すべき形態の一部である。そして、庭園としての機能をもつ石組は、太湖石に酷似している点から「洞天」につながり、実用的機能をもつ井戸も「洞天」、「壺」につながる可能性がある。さらに中庭そのものが「洞天」、「壺」という、もうひとつの宇宙大に反転する世界を内包しているとも考えられる。土地を流れていると考えられているエネルギーを神格化した神、龍脈と中庭とのつながりも出てくる。ベトナム道教において重要な意味をもつ風水思想を中心として、中庭に設置された神棚(祭壇)や線香立ての存在、中庭に祀られている「天の神」、「空気の神」、「水の神」、「竈の神」などの精神的よりどころとしての機能は町家に居住する人々にとって重要な意味をもつものである。第3の「保存すべきエッセンス」からフィードバックされる中庭の望ましい存続形態として「人・自然・神との交流の場となり得る戸外室」を提案する。

8. おわりに

ホイアンは、熱帯モンスーン気候の高温多湿な条件下、フタバガキ混交林の豊かな森林資源を有した中部山岳地帯を背景として、人間活動が継続的に行われてきた土地である。何世紀にもわたる森林資源の伐採の結果、トゥボン川の洪水と土砂の流出が繰り返され、流出した土砂が海から吹き上げられることにより形成されたと考えられる海岸砂丘がホイアン付近に広がっている。ホイアンは、森林資源の切り出し及びその輸出による経済的繁栄と、植生や地形の変遷の相互関係の上に積み重ねられたサーフィン文化や、インド化されたチャムの基層文化をもち、交易に伴うイスラム文化、中国化されたベトナム文化大航海時代以降のオランダ、スペイン、ポルトガルの文化、中国町の中国文化、日本町の日本文化、19世紀以降のフランス文化、アメリカ文化等、様々な文化を受容しつつ空間変容を続けてきた。換言すれば、外界との積極的な交易・交流による繁栄と、それに伴う空間変容の連続がホイアンの歴史である。

現在、中部重点地域の経済開発の一環として、ホイアンの観光開発が計画されており、観光資源及び文化財として、ホイアンの歴史的町並み保存の取り組みが進行中である。保存と観光開発に伴う空間変容の動きのなかで、「何を保存すべきか」について本論文において考察を重ねてきたが、その一方において、ホイアンはこれまでの歴史と同様に将来も外

国人観光客受け入れ等の積極的な経済活動に伴う空間変容を継続することは必至である

ホイアンの町家における今後の空間変容としては、例えば、ファサード及び、前家部分のみ、伝統的なデザインで修復し、その他は、空調設備を入れた近代的なデザインの住宅を建設するという事も想定される。その際、中庭の、第1・第2の望ましい存続形態は空調設備や乾燥機の導入等により一定程度補完することは可能である。しかし、中庭というオープンスペースを失うことは、第3の望ましい中庭の存続形態として考察したような人々の生活や文化と結びついた機能を失うことにつながる。したがって中庭を喪失せざるを得ない空間変容の場合の「保存すべきエッセンス」フィードバックのための補完措置の検討が、今後の課題となってくる。建築に屋上庭園を設ける等の補完措置や、街路、公園などのパブリックなオープンスペースの機能との補完関係の検討などが今後の課題である。

参考文献

- 石井米雄・桜井由躬雄(1985):『東南アジア世界の形成』,講談社,26-268.
- 内海佐和子(1994):生活からみたホイアンの伝統と近代. 平井聖編『昭和女子大学国際文化研究所 紀要 vol.1 ベトナム・ホイアン特集』昭和女子大学国際文化研究所,63-68.
- 大室幹雄(1995):中国庭園考 複製技術時代の終わりに. 株式会社INAX編『鋪地・中国庭園のデザイン』INAX出版,68-77.
- 岡崎文彬(1981):『造園の歴史I』,同朋社,107.
- 小倉貞男(1997):「ヴィエトナム中部地域における文化協力の可能性について」. 社団法人ベトナム協会編『「ベトナム中部地方の経済・社会・文化」-現地調査報告書-(平成8年度外務省補助事業)』社団法人ベトナム協会,27-49.
- 国際協力事業団・ヴィエトナム国計画投資省開発戦略研究所(1997):『ヴィエトナム国中部重点地域 総合社会経済開発計画調査 最終報告書 要約編』,1-38.
- 篠崎正彦(1994):ホイアンの人と生活. 平井聖編『昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.1 ベトナム・ホイアン特集』昭和女子大学国際文化研究所,69-73.
- 友田博通(1994):ホイアン調査の概要. 平井聖編『昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.1 ベトナム・ホイアン特集』昭和女子大学国際文化研究所,5-13.
- 西沢文隆(1974):『コート・ハウス論 その親密なる空間』,相模書房,6-397.
- 林良彦(1995):『近畿町家の住まい』,INAX,6-7.
- 福川裕一(1997):ホイアン市街地の構成. 平井聖編『昭和女子大学国際文化研究所紀要 vol.3 ベトナム・ホイアンの町並みと建築』昭和女子大学国際文化研究所,1-240.
- ベトナム経済研究所(1997):『97年版わかりやすいベトナム経済』,ベトナム経済研究所,12-63.
- 三浦國雄(1995):『風水 中国人のトポス』,平凡社,9-421.
- 宮城俊作(1992):歴史的市街地における「にわ」を媒体とした空間構成単位の研究. 千葉大学園芸学部学術報告,45,133-212.
- 山田幸正(1994):伝統的町家の建築類型に関する一考察. 平井聖編『昭和女子大学国際文化研究所 紀要 vol.1 ベトナム・ホイアン特集』昭和女子大学国際文化研究所,33-39.